

こうさいりゅうみんきゅうじゅつず 荒歳流民救恤図

群馬県土族福鎌芳隆の序文によれば、この図は天保の飢饉（ききん）のとき、京都に滞在していた渡辺華山翁が同志とともに飢民の救済活動を行い、その様子を描いたものである。最初華山の姪に与えられたが、そののち転々として福鎌氏の所蔵となり、前橋積善会の資金集めのため、明治32年（1899）に図画1枚組で出版したものである。

この図には華山の署名のある天保9年（1838）4月の「荒歳流民救恤図并略記」という文が添付されていたことにより、華山筆として流布した。文にはおよそ以下のように記す。「天保7年（1836）夏の雨水災によって凶作となり、そのために米価が沸騰、秋冬には飢饉に加え悪疫が流行し、道路に餓死する者がおびただしかった。これを見かねて不肖定静（華山）が教諭所の儒師北小路大学助と相談して、京都の同志を募り三条橋の南の川原に救小屋を建て、飢饉の流民に衣食・医薬を与えた。救恤は天保8年正月から翌年3月まで続き、対象者1,480余人、内974人が死亡した。死者は五条坂安祥院をはじめ7ヶ寺に葬られた」。

京都の三条川原において救済活動が行われたことは、たとえば天保8年正月の町触（まちぶれ）によって確認できる。同志の者たちが申し合わせて救小屋を建てて施行したい旨、儒者北小路三郎が願い出、それを許可したので、窮民がそこに置いてもらうのは勝手次第であるという内容であった（『京都町触集成』11）。したがって、この救恤図が京都の飢民救済を描いたものであることは間違いない。

渡辺華山筆に疑いを早くに抱いたのは森銑三氏である。「荒歳流民救恤図は華山の画にあらず」（『森銑三著作集』11）という一文を書いている。森氏は、この図は京都町奉行所組の与力平塚茂喬（飄斎）が救小屋の様子を画工小沢華嶽に描かせたものではないかと推測している。何者かが不肖茂喬とあったのを定静とし、画工の華嶽を華山に変え、改竄（かいざん）してしまったのを、福鎌

氏が信じ込んで購入したのではというのである。

田原藩家老の渡辺華山は、天保7・8年の飢饉時、江戸に詰めていた。田原藩でもひどい飢饉となり、藩主三宅康直は国元にあつて対策に苦慮し、華山の出張を望んだが、華山はそのころ病気を患って出かけることができなかった。その代わり、書簡で藩主以下の取るべき方策を細かく書き送った。華山は凶荒対策に並ならない心血を注いでいたが、京都で直接救恤活動をするというのはありえないことであった。

実際に救小屋を発起した平塚茂喬は「今古米銭略考」（『日本経済大典』47）という自著のなかで、その経緯を記している。救恤図の1枚目に橋が描かれ、その近くの川原に「救小屋教諭所」と墨書した幟（のぼり）が立っている。そのころ三条橋の普請が完成し、川原に普請のための材木小屋があったのを救小屋に造り替えたのだという。前述のように儒者北小路の名で願い出た。図に「施財喜捨人名」の名札が壁に貼られ、大釜で粥を煮たり、医者が衰弱した人の脈を取っているところが描かれるが、施粥・施薬の資金は熊谷蓮心（直恭）ら京都の町人有志が私財を投じたものであった。図の最後は、棺桶に入れられた死者が僧侶によって見送られている場面である。救済といっても、100人の内10人が助かり90人が倒れた。棺桶は砂糖屋から買った明樽（あきだる）を使った。それでも、市中で倒れた1,400~1,500人の内、200~300人は全快して、生国に帰すことができたという。

茂喬は、飢民の目も当てられぬ様子、死んだ母の乳房を幼児が含める体相などを、画工小沢華嶽に写させ絵巻物に仕立て、有志の家宝としたのがこの図であったと、書き残している。茂喬（利助）は幕末期の『仁風集覧』の編者でもあり、救済活動に尽くした社会派の与力であった。

情者無性心之可異或火扇益之難
 或疾病事故生於不慮則至忽失活
 路絕祖先祭祀是非極難曉之理也抑
 救人之術非一而賴實事實物以啓沃
 人心為第一要道繪畫之用則在傳
 其實事實物於後馬華山翁之作
 不啻使人養儉素之德亦以足使人
 知害虫驅除之可矜覺傳滌病疫豫
 防之不可不講其功用有不可測者也
 頃前橋積善會負諸君觀此圖以
 有益世道之故覓梓以公之余謂
 華山翁之有此作其意蓋在教後人
 而亦公之所以金先考之志也即容其
 覓併圖十一種及所添屬略記者悉
 寄之前橋積善會且所自梓行發售
 生之餘贏皆使其會自收之供窮民
 施療費之一部以欣前橋積善會之
 為善業明治三十二年五月謹序

群馬縣士族

從五位勳五等福錦芳隆

山岸萬壽書



荒歲流民救恤圖并記

天保七年丙申夏而水災。為海內一
 概。山嶽。米價日昂。饑饉。秋冬。至
 夏。民此。甚多。和之。恩。疫。流行。以
 道。流。流。死者。目下。其。慘。狀。見。之
 心。者。莫。不。有。言。救。恤。不。儒。師。北。捨。大。字
 助。者。深。一。普。都。下。同。志。者。甚。官
 許。可。短。同。八。年。丁。酉。五。月。三。條。橋
 南。積。善。會。救。恤。小。會。始。是。救。恤
 之。始。也。救。恤。五。氏。招。集。衣。食。醫。藥
 之。救。恤。死者。埋。葬。是。九。年。三。月。至。四
 月。止。公。七。十五。月。間。也。救。恤。者。總。計。一。千。四
 百。八。十。餘。人。內。死。亡。者。九。百。七。十。四。人。死。者
 埋。葬。寺。院。七。寺。也。刺

東京安祥院 助川常林院 死于西頭寺
 院子三條橋南村院 死于山姥寺
 六波羅宮 補寺

天保七年四月 四年 福錦芳隆并記

編者 山岸萬壽
 發行所 山岸萬壽
 印刷所 山岸萬壽

荒歲流民救恤圖 (早稻田大学図書館所蔵)

荒歲流民救恤圖序

世之言山歲者先屈指于天明癸卯與天保丙申而天保之凶荒距今實六十餘年比之天明之凶荒其慘狀之傳世者自詳密其感覺亦隨為頗多大矣先考常語兒輩以其所聞歷天保之舊訓勤儉則蓄之不可忽其訓言今猶嚴在余耳底焉當此凶荒之時渡邊華山翁在京師糾合同志經官准大行救恤之事於是翁作荒歲流民救恤圖者與之其姪某後其圖轉輾歸余家而歲自所收飢民之屋舍光景次第以至相積屍僧誦經送之墓凡十一楮精神高遠意匠經營悽慘之情筆力迫真使人有躬親踏其境者據余時展觀之味先考之訓言以及省識身是宜徒弄書畫翰墨之心乎語曰無遠慮者必有近憂善哉言也徵之史概五六十一年之間有一凶歲而天保之後雖幸無凶歲非天時人力能所左右也不可言他年無凶荒則人各自不可無所備之矣或曰方今交通自在貿易繁盛我國一朝有凶苗清米竺穀立輸入宜復呈昔時之慘狀哉此說似是而非也夫在往昔則糧食盡金錢亦齊瓦礫今則縱雖言物料輸入不欠事無金錢之可用何得充飢騰沉於亦不可不思穀價昂騰乎觀之大局文明日進百事備具之今日雖應無饑等橫塗之慘況不詳論仔細考察之飢饉之苗必因年之豐凶而已乎哉若夫人不守儉素之德無備荒之念所得之財貨即直散之放肆遊蕩苟且

